

修士論文（要旨）
2012年1月

夫との関係が妻の主観的幸福感に及ぼす影響
－高齢者の場合－

指導 直井道子 教授

老年学研究科
老年学専攻
210 J 6008
坂本即男

目 次

第1章.	
1. 研究の背景	1
2. 先行研究	1
1) 夫婦関係に関する研究	1
(1) 役割関係	2
(2) 勢力関係	3
(3) 情緒的關係	3
2) 主観的幸福感を測る尺度について	4
3. 研究の目的と意義	4
第2章. 研究方法	5
1. 調査対象	5
2. 調査期間	5
3. 調査方法	5
4. 調査内容	5
5. 概念と測定	5
6. 分析方法	7
7. 倫理的配慮	7
第3章. 研究結果	7
1. 基本的属性	7
2. 仮説	7
1) 仮説1	8
2) 仮説2	9
3) 仮説3	9
4) 仮説4	9
5) 仮説5	10
3. コントロール要因	10
4. 重回帰分析	14
第4章. 結論及び考察	15
1. 仮説について	15
2. コントロール要因の変数	16
3. 重回帰分析	16
4. 結論と考察	17
第5章. 本研究の限界と課題	17
引用文献一覧	
資料 (図表・アンケート調査)	

1、目的

平均余命の伸長とともに、老後の夫婦生活の期間が長くなっている。しかも子供と同居せずにこの間、夫婦だけで老後を過ごす人が多くなっている。これからの、長い老後生活を幸福に過ごすためには、仕事、健康、趣味、孫も良い効果を生み出すことになると考えられるが、次第に社会関係も縮小していくので、特に家庭内のこと、夫婦関係が重要になってくるのではないだろうか。

本研究の目的は、妻の主観的幸福感を高める（或いは低下させる）夫婦関係上の要因を明らかにすることである。より具体的には、夫婦関係を多面的に捉えて、主観的幸福感との関連を追究する。

2、研究方法

調査対象者は、東京都西多摩郡H町に在住し、老人福祉センターに来所した 60 歳以上の在宅の有配偶女性（健常者）113 名で、個別自記形式の質問紙調査を行った。

分析は、2 段階で実施した。第 1 段階は前述した 5 つの仮説をもとに、夫の家事分担、性別役割意識、同伴行動、情緒的サポート及びネガティブサポートの違いが、妻の主観的幸福感に違いをもたらしているかを検討するため、相関分析や一元配置の分散分析を行って、2 変数間の関係を明らかにする。第 2 段階は、妻の主観的幸福感を高める（或いは低下させる）夫婦関係上の要因を明らかにするために、妻から見た夫婦関係とコントロール要因として検討した変数を独立変数、妻の主観的幸福感を従属変数として、重回帰分析を行い、他の独立変数の影響を取り除いた各独立変数の影響を明らかにする。

3、分析結果

5 つの仮説では、仮説 4 「夫からの情緒的サポートがあるほど妻の主観的幸福感が高い」、仮説 5 「夫からのネガティブサポートがあるほど妻の主観的幸福感が低い」は支持され、仮説 1 「夫が家事分担を多くしていると妻の主観的幸福感が高い」及び仮説 2 「夫の性別役割意識が弱い方が妻の主観的幸福感が高い」仮説 3 「夫との同伴行動がよくあると妻の主観的幸福感が高い」は支持されなかった。

重回帰分析では、主観的幸福感と最も関連するのは妻の健康状態であった。次に、ネガティブサポートが有意な関連があった、と結論できる。夫の健康状態及び情緒的サポートは、2 変数間の相関はあるものの、重回帰分析では有意な関連を示さなかった。

また、コントロール要因では、「妻の健康状態」「夫の健康状態」「子供の有無」「子供の別居・同居別」「孫の有無」「孫との関係」「別居の子供または親戚との関係で気を配る人の有無」「別居の子供または親戚との関係でいらいる人の有無」「趣味」などと主観的幸福感の関連性を検討した。その結果、有意な関連が認められたのは、「妻の健康状態」及び「夫の健康状態」並びに「別居の子供または親戚との関係でいらいる人の有無」で、「夫の健康状態と夫の家事分担」は、5 %水準では有意な関連が認められなかったが 10%水準では関連が認められた。

4、結論と考察

全体として、妻の主観的幸福感と関連する要因として、一番効果が大きいのは妻の健康状態であるが、次には、ネガティブサポートの効果が大きく、夫婦関係も妻の主観的幸福感にとって重要であることが分かった。他の研究や本研究の 2 変数間の関係では、情緒的サポートも効果がみられたが、本研究ではその効果はみられなかった。その理由を追究することがこれからの課題である。

5、本研究の限界

本研究は、一地域の老人福祉センターに来所した健常者を対象とした人々であり、ある程度、積極的な高齢者が多かった可能性もある。本分析の結果を一般化するにあたっては、慎重さが必要である。

【引用文献一覧】

- 1) 袖井孝子『老年社会科学臨時増刊号』1984年.
- 2) 編集代表 折茂肇『新老年学第2版』東京大学出版会、1999年.
- 3) 渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子 編『現代家族の構造と変容－全国家族調査 (NFRJ98) による計量分析』松田茂樹「8章、男性の家事・育児参加」東大出版会、2004年.
- 4) 岩井紀子・佐藤博樹編『日本人の姿 JGSS にみる意識と行動』有斐閣、東京、2002年.
- 5) 総務庁 (現・総務省「社会生活基本調査」1996年)、NHK (「国民生活時間調査」2000年)
- 6) 岩井紀子「高齢層の夫婦における夫の家事参加－夫婦の就業、世帯構成、性別役割分業観に関する分析－」大阪商業大学論集、1998a.
- 7) 厚生省人口問題研究所編 (1996)「現代日本の家族に関する意識と実態－第1回全国家庭動向調査 (1993年)」厚生統計協会、東京.
- 8) 兵庫県家庭問題研究所「夫婦の年齢段階別、健康状態別のライフスタイル」『老人夫婦のライフスタイルに関する調査研究報告書』1987年.
- 9) 盛山和夫編『日本の階層システム－ジェンダー・市場・家族』岩井紀子・稲葉昭英「10章、家事に参加する夫、しない夫」東京大学出版会、2000年.
- 10) 宮野直子「共働き家族における夫婦関係の権威構造に関する一考察－主婦専業家族との比較」『大阪女子学園短期大学紀要』14号、1970年.
- 11) 袖井孝子・都築桂代「定年退職後夫婦の結婚満足度」『社会老年学』No22、1985年.
- 12) 古谷昭「夫婦関係における伴侶性」『金城学大学論集社会科学編』23、1980年.
- 13) 高橋正人「老夫婦の配偶者満足度－東京都内の団地調査から－」『社会老年学』No 33、1991年.
- 14) 和田修一「社会的老化と老化への適応－人生満足度を中心として」社会老年学、No11、1979年.
- 15) Larson, R, “Thirty years or research on the subjective well-being of older Americans”. *Journal of Gerontology*, 33 (1)、1978.
- 16) 前田大作・浅野仁・谷口和江「老人の主観的幸福感の測定－モラル・スケールによる測定の試み」社会老年学、No 11、1979年.
- 17) 和田修一「社会的老化と老化への適応－人生満足度を中心として」社会老年学、No11、1979年.
- 18) 古谷野亘「主観的幸福感の測定と要因分析－尺度の選択が要因分析に及ぼす影響について」社会老年学、No20、1984年.
- 19) 横山博子「主観的幸福感の多次元性と活動の関係について」社会老年学、No 26、1987年.
- 20) 藤田利治・大塚俊男・谷口幸一「主観的幸福感のその関連要因」社会老年学、No 29、1989年.
- 21) 直井道子「都市居住高齢者の幸福感－家族・親族・友人の果たす役割」総合都市研究、第39号、1990年.
- 22) 古谷野亘「団地老人におけるモラルと社会関係－性と配偶者の有無の調節効果」社会老年学、No35、1992年.